

ICTを活用した地域活性化に学校が連携する試み

神戸星城高等学校 教諭 延原 宏

キーワード：ICT, 地域活性化, 商店街, 近隣住民

実践の概要

神戸市新長田の商店街をパソコンやスマホで体験できるWebサイト（バーチャル商店街）として生徒が取材して製作した。商店街画像を行きたい方向にクリックして進行し、商店街やお店が変化する。お店画像をクリックすると店舗情報や店主が登場するCMが閲覧できる。また、店舗によっては、ショッピングバスケット機能によって商品が購入でき、店舗ページに書き込まれた「合言葉」を店舗で伝えると割引やプレゼントを受けられるなど、ICTを活用して仮想空間と現実空間を融合する試みを行っている。

1. 目的・目標

(1) 商店街活性化実践の流れ

商店街活性化実践を以下のような流れで行った。

- ① 店主との交流（取材）を通して責任感を生み出す。
- ② 取材した内容を集客に繋がる情報へと編集する。
- ③ 情報発信者としての責任や訴求力のあるWebページの編集技術・デザインセンスの習得へと繋げる。

コンピュータ活用のスキルを画一的に身に付けさせるのではなく、技術が必要となるシーンを創出し、実現のために必要な活用スキルを生徒が主体的に身に付けていくことをねらいとし、ICT活用を通じた実践的な情報活用能力が身に付くよう意識した。

(2) 活動のステージ

生徒の主体性を生み出すためには、強い動機が必要である。そこで、阪神・淡路大震災まで商店街と隣接していた本校の校舎が震災によって倒壊し、移転を余儀なくされた経緯や、商店街も焼け野原となって壊滅的なダメージを受けたにも関わらず、支援の手を差し伸べていない現状を伝えた。

さらに、店主に多くの本校卒業生がおり、本校への愛着を感じていてくれていることを伝えた。また、地域にある大規模小売店舗が焼畑商法で、収益が上がらなくなると撤退するという希薄な関係にあり、地域の活性化に繋がらない側面と地元商店街の活性化が地域の発展と密接に関わっていることを理解させ、愛情を持って取り組めるようにした。（図1は長田区の人口推移と写真1は震災時の本校）

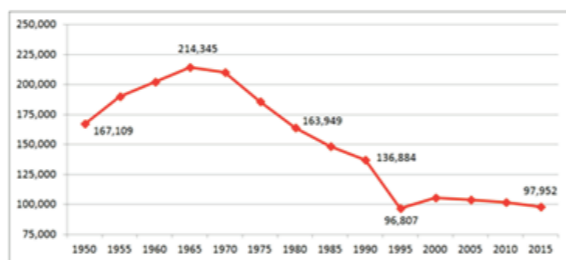


図1 神戸市長田区の人口推移



写真1 阪神大震災時の本校とその周辺

2. 実践内容

2.1 実践での工夫

既存の商店街Webと差別化を図るため、閲覧者が商店街を歩いているかのような錯覚を起こさせる手法として、商店街を全ての角度から静止画像として撮影し、バーチャル商店街として完成させた。

利用する側の視点で考えさせ、生徒の「こんなことができたなら面白い」というアイデアを採用し、店主が登場するCMを作成し、店舗Webページに埋め込んで公開した。

また、商店街を徒歩で利用する老人が重い商品を持って帰る姿を見た生徒が、重い商品のショッピングバスケットを作成し、ネット上で購入を可能にした。プログラミング言語もマスターしなければならない環境を提供する工夫を行った。

2.2 実践での評価

全ての活動がグループで活動することから、グループ員間で相互評価が自然に行われる環境となるよう意識した。また、商店街での取材活動シーンをデジタルビデオで撮影し、評価できるシーンを3分程度に編集させた。この動画を評価会議で活用し、自らの優れている点や他

者の優れている点から自らが不足している能力に気が付き、学習の方向性を変化させていくメタ認知力育成にも効果があるよう工夫した。

3. 実践の成果

収集した情報をWebページ作成のために分析・加工することによって地元商店街の持つ良さや課題を認識し、活性化の方策について具体的に示すことができた。

3.1 情報に関する意識変化

取材活動を通じ、商店街の持つ地域のコミュニティとしての役割、店主の悩みや自分たちとの意識のズレなど、これまで気付かなかった商店街の良さや抱える課題などを発見することができた（表1）。

表1 商店街と本校が協働する際のSWOT分析

	助けになる要因	妨げになる要因
内部要因	<ul style="list-style-type: none"> ICT活用が得意(高校生) 1時間に40名単位での労働集積が可能(高校生) 活性化面での公的資金が豊富(店主) 継続した活動ができる(店主) 商品の専門知識がある(店主) 	<ul style="list-style-type: none"> ICT活用が苦手(店主) 労働集積が低い(店主) 資金が乏しい(高校生) 継続した活動が難しい(高校生) 商品の専門知識がない(高校生)
外部要因	<ul style="list-style-type: none"> 新長田合同庁舎が完成(昼間人口が1,000人増加) アディダスジャパンの開業拠点が長田区に進出 活動のマスメディア掲載 行政、店主などが活性化を求めている 	<ul style="list-style-type: none"> 大規模小売店の台頭 モータリゼーションの進展 少子高齢化

Webデザインについては、生徒のデザイン案を出力し、生徒の投票によって採用を決定し、競争による刺激を与えるよう工夫した。また、Webページを改ざんされないように設定する上で重要なパーミッション等のネットワークセキュリティについて具体的に理解させることができた（写真2）。



写真2 成果物とコンテンツ作成に取り組む生徒の様子

3.2 ビジネス場面におけるコミュニケーション能力

店主や商店街利用者から情報を直接収集し、販売促進に繋げる観点で発信する情報をまとめる活動を通して、店主を饒舌にさせる発問技術や旬情報・売れ筋商品などをWebページに掲載するなど、ビジネスセンスとビジネス場面におけるコミュニケーション能力が高まった。また、グループでの取材行動を動画で撮影し、評価でき

るシーンを再編集することによって、相互評価が行われ、他のグループ員のみならず、普段気付くことのなかった新しい自分を発見することができるようになった。

こうして商店街の理解・郷土愛に基づいた商店街活性化策を主体的・具体的に示すことができた。



写真3 商店街・近隣店舗での取材活動

3.3 ICT活用での成果

Webページ上でイメージマップの機能を利用し、現実空間の商店街で回遊しているような操作性を持つバーチャル商店街を作成させた。アプリケーションソフトを活用して課題を解決するという生徒の遊び心を利用し、学習意欲を向上させ、主体性と創造力を同時に培うことができた。

Webデザインについても、具体的にここを直すといったアドバイスを避け、コンテンツの整列方法・情報のメリハリなどに制限することで、生徒の創造力を引き出し訴求力を高める観点から適切な助言を行うことで、実効力のあるWeb作成能力を身に付けさせることができた。

現在は紙媒体による発行を行い、情報発信力を強化している。

4. 今後に向けて

生徒たちは、ICTの操作スキルを活性化の道具として商店街の店主や近隣店舗に提供することで、必要とされる喜びを感じ、活性化に対して主体的に取り組むように変化した。

こうした背景には、店主の高齢化が進み、ICTを活用してビジネス面での成果を求めているものの、「どのように取り組めばいいかわからない」といった状況が、生徒たちへの大きな期待となっている。生徒たちにとっても、これまで受動的な態度で仕方なく学習してきたパソコン実習の授業でも積極的に学ぼうとする姿勢が見られたり、操作スキルが身に付くスピードまで向上した生徒も見られた。



写真4 個店Webの内容と神戸新聞の取材シーン

こうした活性化実践の取り組みを通して、生徒たちの意識は大きく変化し、作成するコンテンツの質的向上に繋がっていった。また、生徒たちの進路決定においても、地域の活性化を担うために、自治体への奉職を希望する生徒が急増するなど、ICTを活用した地域活性化の取り組みが、郷土愛の醸成に繋がり、生徒のメタ認知力へと昇華している。